

高次脳機能障害者の障害理解と職業リハビリテーション支援に関する研究 —自己理解の適切な捉え方と支援のあり方—

○竹内 大祐（障害者職業総合センター 研究員）

小野 年弘（元 障害者職業総合センター(現 千葉大学大学院看護学研究科)）

1 背景と目的

職業リハビリテーション（以下「職リハ」という。）においては、障害者の職業生活への適応に向け、自己決定等を支援するために「自己理解」が重要とされている。一方で、高次脳機能障害者は、自らの障害及びその影響の理解に困難を伴う場合が多い。また、岡村¹⁾によると「自己理解」を深めることがメンタルヘルス上の問題に結びつく可能性もある。職リハにおいて、「自己理解」に着目した支援を行うことが重要であることに違いはないが、「自己理解」を深めることに焦点をあてることにはリスクが伴う。したがって、望ましい支援のあり方を検討する必要がある。

本稿は2020～2021年度に障害者職業総合センター研究部門が実施した「高次脳機能障害者の障害理解と職業リハビリテーション支援に関する研究」の内容を報告する。

本調査研究はまず、職リハ従事者が高次脳機能障害者の支援で用いている「自己理解」の捉え方や支援の実態を明らかにする。次に、医療等領域における「障害理解」に関する知見や動向を文献から整理する。その上で、これらを統合・整理することで、高次脳機能障害者の「自己理解」と職リハ支援の望ましいあり方及び残る課題を明確にすることを目的とした。なお、医療等領域で「自己の障害やそれに関連する問題についての理解」を示す「障害理解」の概念と職リハ領域の「自己理解」の概念は重なっている部分はあっても、異なる概念であると仮定し、区別して表記した。

2 方法

(1) 第1次フォーカスグループインタビュー（以下「第1次FG」という。）

職リハ従事者が、高次脳機能障害者の「自己理解」をどのように捉えて支援をし、その支援過程でどのような困難を感じているのか明らかにすることを目的に、10年～20年の業務経験のある障害者職業カウンセラーを対象としたグループインタビューを行った。

(2) 文献調査

「障害理解」の概念の捉え方、支援方法に関する国内外の文献を調査した。その上で、第1次FGで明らかになった職リハにおける「自己理解」の捉え方や支援に関する実態との共通点を整理した。

(3) 第2次フォーカスグループインタビュー（以下「第2次FG」という。）

第1次FG及び文献調査の結果を踏まえて作成した支援仮説の内容をテーマに10年～20年の業務経験がある障害者職業カウンセラーを対象としたグループインタビューを行った。この結果を基に支援仮説の修正を行い、高次脳機能障害者の「自己理解」の性質を踏まえた望ましい支援及び残る課題を明らかにした。

3 結果

(1) 第1次FG

障害者職業カウンセラー合計15名を3グループに分け、第1次FGを行った。

この結果のまとめは、以下のとおりである。

- 障害者職業カウンセラーは、高次脳機能障害者の「自己理解」の概念の捉えにくさを感じていた。「受容」等の心理的要因や、障害特性及び社会環境的な要因によりその状態像が変わることや、「自己理解」という用語の概念が幅広いため支援機関又は個人によって捉え方が異なっている可能性があることが捉えにくさの要因であると考えられた。
- 障害者職業カウンセラーは、「自己理解」の支援を行う際に、支援対象者との信頼関係の構築を基盤とした上で、支援対象者の支援ニーズや目標に着目し、その目標達成に向けたアプローチを行っていた。この際、「自己理解」の深化を目標に掲げるというよりは、行動変容や環境整備による課題解決や解消に目を向けた支援を行う中で「自己理解」を支援するという態度をとっていた。
- 「自己理解」の支援には長期的な視点が必要との認識が根本にあるため、家族や会社の同僚を含めた周囲のサポート体制や支援機関の連携体制の構築を重視していた。しかし、このような周囲のサポート体制は、社会資源の問題又は重要な他者と支援対象者との関係性など、様々な事情により構築しにくい場合もあることが難しさとして挙げられた。

(2) 文献調査

ア 「障害理解」の捉え方と支援

医療等領域における「障害理解」の概念整理の発展、「障害理解」の評価及び支援の効果的な実施方法について

文献調査を行った。主要な点を以下に示す。

- 「障害理解」の多様な側面を指摘しているモデルがあった。例えば Toglia & Kirk²⁾ は、「障害理解」を「自分の能力と限界についての知識」、「課題の性質ややり方についての知識」、「今行っている課題ができていくかどうかの認識（セルフモニタリング）」、「自己のパフォーマンスの予測」等に分けて捉える必要性を示していた。
- Fleming & Ownsworth³⁾ は、「障害理解」が生物・心理・社会環境的な影響要因により変化することであることを指摘し、これらの影響要因を考慮した支援選択の重要性に言及していた。
- Toglia & Maeir⁴⁾ は、「障害理解」自体を支援目標とするのではなく、本来の目的を意識した手法選択の重要性を指摘していた。

イ 第1次 FG 結果と文献調査結果の接点の整理

第1次 FG 及び文献調査の結果を統合し、共通点や相互に補充している点を以下(ア)(イ)のように整理した。

(ア) 高次脳機能障害者の「自己理解」を捉えるための視点

- 「自己理解」を「能力や限界についての知識」「課題についての知識」「セルフモニタリング」「パフォーマンス予測」といった多面的な側面に分けて捉え、アセスメントすることが重要である。
- 「自己理解」に影響を与える生物・心理・社会環境的な背景要因を意識する必要がある。
- 「自己理解」を深めること自体を目的とするのではなく、支援対象者の目標達成に向けた支援を行う中で「自己理解」を支援する意識が重要である。

(イ) 「自己理解」の性質を踏まえた支援方法の選択

- ①信頼関係を構築して協働関係を結ぶこと、②支援対象者の目標達成に向けた支援を行うこと、③社会環境的なサポート体制を整えることが、支援を行う際に前提として持つべき視点である。
- 生物・心理・社会環境的視点でのアセスメントを踏まえ、心理的ストレス増大のリスクがある場合には、上記の前提に重点を置くことや、習慣形成、動機を高めるアプローチなどを選択する必要がある。

(3) 第2次FG

ここまでの整理を支援仮説とした上で、望ましい支援と残る課題を明らかにするため、支援仮説のメリット・デメリット、代替案や課題をテーマに第2次 FG を行った。第2次 FG は、障害者職業カウンセラー合計17名を対象に、3グループに分けて実施した。結論は次のとおりである。

ア 支援仮説を踏まえた支援の有用性

- 「自己理解」の多様な側面、多要因の影響を考慮する考え方は、職リハ従事者にとっても実感のある考

え方であった。また、信頼関係の構築、目標達成に向けた支援、社会環境的サポートの活用といった基本的な姿勢の有用性も支持された。

- 支援目的に沿った「自己理解」の支援のため、社会環境的側面への支援や、社会資源を活用し長期的な視点で支援することの重要性が、改めて指摘された。

イ 支援仮説に明記すべきポイント（修正事項）

- ①「残存能力」や「できるようになること」に着目する視点や②フィードバックの工夫（問題を支援対象者の中から切り離して扱う外在化及び多くの事例で一般的に見られる事象として課題を伝える一般化の手法、相談内容を書き出し一緒に振り返るなどの相談における一貫性の意識、仕事に関連付けた補充手段の提案）が追記ポイントとして挙げられた。

ウ 残る課題

- 今後の課題として、①社会資源の活用や連携における課題（社会資源の不足や、支援機関間での共通認識の難しさ）、②継続的な支援の難しさ、③障害を就職（復職）先に開示することの難しさ、④心理・社会的側面の把握や見極めの難しさが挙げられた。

以上の結果を踏まえ、支援仮説の修正を行った。完成したものは、『高次脳機能障害者の「自己理解」の性質を踏まえた支援ポイント～「自己理解」を捉え、支援するプロセス～』として、本発表と同じタイトルの調査研究報告書 No. 162 の巻末資料として掲載した。

4 考察

本調査研究により、高次脳機能障害者の「自己理解」を理解するための枠組みについて一定の整理ができたと考えられる。これにより、高次脳機能障害に係る職リハ関係者間の共通理解に繋がることを期待できる。今後は、この枠組みを基に、より具体的なアセスメント手法や、職場の理解促進に繋がる示し方等の開発が研究課題になると考える。

【参考文献】

- 1) 岡村陽子『セルフアウェアネスと心理的ストレス』、「高次脳機能研究 vol.32」, (2012), p.438-445
- 2) Toglia, J. & Kirk, U. 『Understanding awareness deficits following brain injury』, 『NeuroRehabilitation vol.15』, (2000), p.57-70.
- 3) Fleming, J., Ownsworth, T. 『A review of awareness interventions in brain injury rehabilitation』, 『NEUROPSYCHOLOGICAL REHABILITATION vol.16(4)』, (2006), p.474-500
- 4) Toglia, J. & Maeir, A. 『Self-Awareness and Metacognition: Effect on Occupational Performance and Outcome Across the Lifespan.』, 『Cognition, Occupation, and Participation Across the Lifespan』, AOTA Press, (2018), 143-163.